120. 岡山県の胃集団検診に携わる技師の 精度向上に対する意識調査

財) 倉敷成人病センター

小 西 光 男
(Mitsuo Konishi)
丹 谷 延 義
(Nobuyoshi Tandani)

小 笠 原 光 男
(Mitsuo Ogasahara)
藤 照 正
(Terumasa Fuji)

(目的) 昭和60年度岡山県総集検受診対象者のうち、28.0%が受診しており、胃がん発見率は0.12%でした。今後さらに受診率の増加が見込まれるため、より一層の効率化とそれに伴う精度の向上が望まれてきた。そこで、胃集団検診の現状を把握し問題点を見つけ出すために、岡山県の技師に対し、どのような精度向上に対する考えや行動がとられているかについて、アンケート調査を行い、検討を加えたので報告する。

(方法) 岡山県対がん協会に参加している間接胃検診機関26施設に郵送等でアンケート用紙を配布し、その結果21施設(80%)の回答を得た。アンケートは53項目の自記式とした。

(結果) ・使用バリウムはゾルの100%と80%が7割を占め、残りはパウダーを水に溶いたもので、パウダーは主に施設検診に用いられている。(fig. 1)
・自動現像機は間接専用の自現機を使用しているところが4施設しかなく、ほとんど直接用大型自現機を用いている。(fig. 2)
・能率化を計るための検討は技師及びその他関係者において余りなされておらず、技師と施設内外ともに検討がなされているのは6施設である。(fig. 3)
・研修会・学会については余り出席がなされていない。(fig. 4)
・読影医師とのコミュニケーションについては、読影時に技師が意見を述べているのは7施設、医師からフィルム濃度、バリウムの付着具合などについて指摘を受けているのは11施設で、両方なされているのは、わずか4施設である。

- ・間接撮影基準A・B法に基づく施設申告体位と実際体位の検討 (fig. 5) によると、申告体位と実際体位とが合致していたのは8施設である。
- ・撮影枚数は6〜9枚まであり、車検診(14施設)と据置式検診(7施設)の2方式がとられ、うち4施設が圧迫筒による撮影を行っている。(fig. 6)
- ・実際の撮影体位は5体位(腹充・背正・背一斜・背二斜・立正)を主とし、さらに前壁撮影と半臥位第二斜位(シャツキー)をほとんどの施設で行っている。(fig. 7)

施設申告体位

施設方式 (16施設)	B-2 (3)	A-2 (2)
-------------	---------	---------

実際体位

施設方式 (13施設)	A-2 (3)	B-2 (5)	A-1 (1)	A-2 (1)
-------------	---------	---------	---------	---------

撮影枚数と検診方法 (fig. 6)

検診方法	6	7	8	9
車	4	8	1	1(1)
据置	1	4(2)	2(1)	
計	5	12(2)	3(1)	1(1)

()は圧迫筒を使っている施設

(まとめ) 以上が岡山県における胃集団検診に携わる技師の精度向上に対する意識調査であるが、各要因についての意識が低いように思われるので、今後は一方法として指導医師を置いた地区研究会などの発足を望む。